

巻頭論文

「経験」・「未来」・「天使」

—「逋信省とは何であったか」を考えなければならない理由についてのいくつかの予備的考察—

杉浦 勢之

The time is out of joint.

O cursed spite,

That ever I was born to set it right.

ウィリアム・シェークスピア 『ハムレット』

1 人間的経験イメージの臨床

(1) ケース I : 暴力

いくつかのイメージが脳裏に宿っている。その一つは2001年9月11日、帰宅して何気なくスイッチを入れたテレビ受像機に、何か異様な映像が繰り返し流れていた。テロップもコメントもない映像を眺めながら、それが何であるかを掴めず、ただこれまで見てきたものとは違うという不思議な感覚がしばらくつづいていた。それが大型旅客機を複数ハイジャックしたアルカイダによるアメリカの複数施設を狙ったテロであることがわかったのは、少し時間がたつたことであった。それからしばらくして、研究室のPCを開くと、数年前に卒業した卒業生からの電子メールが目飛び込んできた。懐かしい思いで開いてみると、内容は愕然とするものであった。

彼女は今自分がニューヨークの法律事務所（それはテロで倒壊したツインタワーの近く、被害が及んだ場所からぎりぎりのところにあったという）に勤めていることを告げ、周りがパニックに陥っていると切実に訴えたものであった。日本人同士で、これからもつづくかもしれないテロの危険にどう対応するかを話し合っているという。集団でヨーロッパに逃れるという意見が大勢を占めつつある中、ふと東京にいる私のことを思い出し、意見を訊いてみようと思ったというのである。それは、これまで受けたメールの中で、もっとも奇妙で切実、そして悩ましいものであった。アメリカ政府ですら事態を正確に把握できていなかった時点のことである。

「現場」にいるのは彼女のほうであり、こちらは遠い地で、間接的なメディア情報しか持ち得ていない。とても責任ある意見を述べられるとは思えなかった。PCの画面を眺めながら、思考がぐるぐる回っていたのを記憶している。浮かんだのは企業研究で知り得たジョブ・トレーニング、第二次世界大戦の特攻隊員の手紙の一文、そして何故か無機質な成田空港の搭乗ゲートとその前を足速に過ぎていくクルーたち。

在学時、とても真面目に講義内容に取り組んでくれていた学生であった。こちらの一言が、まかり間違っても彼女の一生、場合により生死を決めかねない。そのうち、思考の渦からこれまで得てきた知識がようやく結晶するようになった。まず彼女の無事にほっとしたことを告げ、

この時点での判断を伝えることとした。3機の大型旅客機がハイジャックされ、テロの武器とされたことだけはわかってきていた。やがて4機目のハイジャック機が墜落していたことも確認された。相当に統率されたテロ組織であっても、大型旅客機を操縦するだけの知識を備え、訓練に耐え、自らの死を代償に正確にターゲットに突入していけるだけの「人材」をそれほど多く養成することはできないであろう。(これは半分当たっていた)。このグループは、すでにニューヨークのツインタワーという、グローバリゼーションと新自由主義の象徴を倒壊させ、世界を震撼させるという(おそらく所期の)目的を達成してしまった。したがって、もし後続するテロがあるとしても、それはニューヨークではない蓋然性のほうが高い。それはもしかしたら、ヨーロッパかもしれない。(これは当たらなかったが、残念ながらその後違うかたちで現実となった)。むしろニューヨークは、今のところもっとも安全なのではないだろうか。(これは当たった)。そのようなことを書いて返信した。クリックした瞬間、本当にこれでよかったのかとの思いが全身に駆け巡ったが、緊張の中、これまでの知識を総動員してのこれがその刹那の結論であった。

この9・11を契機に、アメリカは国際的に対テロ戦争を呼びかけ、「戦争」は国境を越え、サイバー空間を通じて日常の中に浸みだしていくことになった。アメリカの政治学者であるサミュエル・ハンティントンが、1996年に『文明の衝突』を発表し、巷間に流布していたが、そんなわけではないだろうと思わざるを得なかった。掲げられた「言葉」は古いものであっても、9・11はどこから見ても現代的な、したがって欧米のつくり上げた技術の延長上に仕組まれたテロ攻撃である。いささか不謹慎な言い方になってしまうが、マクルーハンが述べるように、「メディアはメッセージ」だ。たとえそれが信仰の名の下に現実空間において繰り返し広げられ、多くの血に塗れたものであろうと、それは紛れもなくある現代的な憎悪のメッセージであったに違いない。今や「テロ」という「言葉」は、一国の元首の発言から市井の人々の「眩き」まで、自らに不都合な相手に貼り付けるメッセージ、都合のよい「プラスチック・ワード」と化してしまっている⁽¹⁾。現実につづいたのは「破たん国家」の続出と、世界的難民の流出、そして「民主主義国家」内の分断と自閉であった。9・11は、フランスの現代思想家アラン・バデュウの言うところの「出来事」であった。だが私が思い出すのは、常にこの二つの映像、テレビに映しだされた、繰り返しツインタワーに突っ込んでいく白い機体と、PC画面に浮かんだメール、そして授業が終わった後、解放されたように教室で陽気に踊り出した、かつてのあの学生の弾けるような笑顔の記憶である。それは、メディアを通じて時間と空間が捻じれながら交錯する「例外的」なイメージである。

(2) ケースⅡ：危機

ついで浮かんでは消える記憶の底にこびりついて離れないイメージは、グローバル金融危機を引き起こした2008年9月のリーマン・ショックのときのことである。一応現代の金融証券史を専門とし、自嘲的に「金融危機屋」を称していたから、時々刻々と伝えられる情報を通じて、何が起きたかについては把握できていた。これは世界金融恐慌かもしれないとは思いつつ、冷静に情報に向かっていた。かつての「ブラック・マンデー」や、バブル崩壊時、あるいは1997年の日本の金融危機の記憶をたどりながら、日本では金融危機にいたる蓋然性は低いと見込んだが、アメリカから始まる金融危機が世界に広がり、实体经济を通じて日本経済に与える影響

1 プラスティック・ワードの定義については、ウヴェ・ペルクゼン『プラスチック・ワード 歴史を喪失したことばの蔓延』(糟谷啓介訳、藤原書店、2007年)を参照。

の度合いは、それをはるかに超えるのではないかというのが、その時の見立てであった。

研究室の仕事を終え、夜も更ける中、帰宅の途に就いた。帰りに一緒になった大学院生と渋谷の歩道橋を上ったところで、不意に奇妙な感覚に襲われた。さすがに人込みはだいぶ減ってはきていたが、渋谷の街頭にはまだ多くの人々が行き交っていた。車のヘッドライトが光の数珠のように連なり、少し酒気を帯びた若者たちが、交差点でもつれ合いながら大声をあげている。普段と何も変わらない風景。こうして歴史はつくられていくのかな、立ち止まって眩くと、大学院生が訝しそうな顔を向けた。いや急にロシア革命の10月蜂起のことを思い出したのだよと告げると、ますます謎な顔をした。確かな記憶ではないが、1917年ロシアのボルシェヴィキがペトログラードで10月蜂起をした前夜、市民たちはオペラハウスでシャリアピンの歌声に酔い痴れていたのだそうだ。次の日に世界を変える事件が起きるのも知らないでね。そう告げると大学院生はさらに悩ましい表情になった。無理もない。これは歴史家としての感慨だから。

ペトログラードはその後レニングラードと改名された。しかし1922年に成立したソヴィエト連邦がそのほぼ70年後の1991年に崩壊すると、この歴史都市は古のサンクト＝ペテルブルグという名前に戻され、今日にいたっている。20世紀の壮大な社会実験は、多くの悲劇を生みながら、希望と混乱を人類にもたらしたが、1世紀を経ずしてあっけなく終わりを告げた。ソ連崩壊の翌年、ハンティントンの弟子、アメリカの政治学者フランシス・フクヤマは『歴史の終わり』で、高らかに自由と理性の勝利を謳った。この時の苦々しい思いが蘇った。そんなはずはない、我々はオープンエンドな「今」を生きている。だからこの「瞬間」にも、あの時の混乱はつづいているはずだ。そんな複雑な感情がない混ぜになり、なぜか急に10月革命のシャリアピンのエピソードが浮かんだのである。若い頃、このエピソードをどこかで読み、「歴史の瞬間」に立ち会うとはどのような感じであろうかと夢想したが、今度はそれがアメリカから始まる。それは穏やかな何時もと変わりのない渋谷の夜の巷にそっと息を潜ませているのだと。

リーマン・ショックはその後のグローバル金融危機に広がり、今も世界経済はそこから完全には立ち直りを見せていない。(何をもって完全というかは相当問題であるが)。危機はその後、ヨーロッパでサブリン危機に発展し、EUを揺るがすことになった。アメリカの失業率は高止まりし、これはだいぶ経ってのことであるが、大方の予測を裏切ってドナルド・トランプというきわめて異質な大統領を生むことになる。クリントン政権で財務長官、オバマ政権で国家経済会議委員長を務めたあのローレンス・サマーズが、後にアメリカにケインズ革命をもたらした1938年のアルヴィン・ハンセンまで持ち出し、「長期停滞論」を表明した。ハンセンは、世界恐慌後アメリカ経済がなかなか立ち直りを見せなかったことから、技術革新の停滞、フロンティアの喪失、人口減少などの構造要因により、投資が減退し、アメリカが需要不足による長期停滞に入ったのだと説いた。サマーズはこの説を受けて、利子率と投資率がともに低下していることを指摘し、自然利子率がマイナスとなり、現代のアメリカ経済が過剰貯蓄＝需要不足に陥っているとしたのである。ロバート・ルーカスが合理的期待形成学派のマクロ経済学の勝利と「ケインズ経済学の死」を言祝いだわずか10年後のことである。どうやら世界は「不合理な期待」で満ち溢れているらしい。

サマーズの「予言」は、日本の「空白の10年」を説明するのにより適していた。東京大学の岡崎哲二や福田慎一は、若干のニュアンスの違いを見せつつ、これを認めている⁽²⁾。むしろ日本経済の10年を観察し、世界にジャパナイゼーションが起きることを懸念しての見解のように

2 岡崎哲二『経済史から考える 発展と停滞の論理』日本経済新聞出版社、2017年、
福田慎一『21世紀の長期停滞論 日本の「実感なき景気回復」を探る』平凡社新書、2018年。

も感じられる。ノーベル経済学者であるポール・クルーグマンやジョセフ・スティグリッツもまた、サマーズの「長期停滞論」を受け入れており、来日時に、それぞれ首相官邸に呼ばれ、（何が本当に話し合われたかは不明ではあるが）懇談したことは記憶に新しい。

リーマン・ショックを経て、アメリカの金融の「パンドラの箱」の底に残っていたのはどうやら「強欲」であったということになったらしい。しかしその「強欲」を可能にしたのは、金融工学の粋であり、「目的合理性」によって未来を先取りできるとした「傲慢」ではなかったか。それを支え育んだのが、サブプライムと「格付け」された低所得者層の、中産階級の象徴である戸建住宅と自動車への熱い「想い」であったというのが、バブルを経験したことのある身には切ない。当の日本はといえば、もともと「空白の10年」を経過していたところにショックが加えられたのであるから、経済の立ち上がりはさらに厳しい。最近明らかになってきたが、当時日本の大企業の中には、資金ショートぎりぎりまで追い詰められていたものもあるという。中規模国の自動車市場が一瞬に蒸発してしまったような衝撃が世界経済を覆っていた。日本の企業行動もガバナンスも、「97年危機」と「リーマン恐慌」によってはっきり変わってしまった。

幸か不幸か、「空白の10年」によって縮んでしまっていた日本の金融機関は、急性の危機を見せるにはいたらなかったが、金融技術革新（フィンテック）の波と、安倍政権の下での日銀の「クログノミクス」に挟まれ、未だ将来モデルを見いだせずにいる。正統な金融政策がとて取りにくいのは確かであろうが、アベノミクスの一本目の矢である「黒田バズーカ」によって「インフレ期待」に訴えたものの、その目標は達するにはいたっていないし、「空白の20年」を通じて悪化をたどってきた財政を抱える日本は、クルーグマンの提唱するような大幅な財政出動に打って出る余地を残していない。アメリカの景気回復が見られるようになった今こそ、三本目の矢が問われるということなのだろうが、世代間で痛みを分け合う、国民的合意を得られる長期ビジョンなくしては、それらは「個別案件」として現状に吸収されていくだけであろう。世界も日本も、まだ「出口」を思いあぐねている。時間は経ち、意図しなかった「未来」が待ち受けているのかもしれない。

何事もないように通り過ぎ、他愛無い言葉でお互いの存在を確かめ合いながら家路に向かう人々の姿と、中央分離帯を間に白と赤に対照的に滲んで輝く、流れる光の車列、私の眩きの応えにまごつく大学院生の戸惑った表情、それがリーマン・ショックの日のイメージとして記憶に定着している。そしてやはり、それは今でも変わらない。

(3) ケースⅢ：破局

最後に挙げなければならないのは、2011年の3・11である。東日本を襲った大震災を東京の青山通りで迎えた。激しい揺れに驚き立ち止まった。すでに大学は春休みであったが、いくつかの仕事があり、仕事場に急いでいた時のことである。揺れは身体をわしづかみに揺すぶるよう押し寄せてきた。これは普通ではない。同伴していた若い同僚がビルのほうに向かおうとするのを押しとどめ、青山通りの車の流れが止まったのを確かめてから、通りの真ん中に避難した。その動きで私の存在に気づいた周辺の学生から、名前を呼ぶ声がした。すぐに近くに来るよう声をかけ、数人で身を寄せ合った。揺れが鎮まった頃を見計らって、キャンパスに移動することを指示した。大学が緊急時の避難場所に指定されていたことを思い出したのである。この時、震源は関東であろうと思い込んでいた。事態がそのような想像を遥かに超えるものであることがわかったのは、学内に入り、推移を見届けるため大学の本部のある建物の一室で同僚学部長と待機していた時であった。仙台空港に津波が押し寄せているとの一報が入った。仙台空港だって、と同僚が呻くような声を上げた。空港は海岸から距離があるはずだ。とんでもな

いことになっている。この時ようやく事態の深刻さを理解した。テレビのある部屋に移動すると、静かに（そう見えた）膨大な水の塊が空港を舐めるように洗っていく。巨大な生き物のようだ。迂闊にも自分が変事を中心にいると思っていたが、想像を超える巨大な「出来事」の端で右往左往しているだけなのだ、打ちのめされる思いで、ただ黙って喰い入るように映像を見つづけていた。

刻一刻と深刻な事態が報道される。どこか現実感のないままそれを聴いていると、追いかけるようにして報告が入ってきた。キャンパスにどんどん人が流れ込んできています。何が起きているのか、慌てて夕闇迫るキャンパスに出てみると、校門から多くの人が入ってくる。どうやら交通網が寸断されたため、歩いて帰宅を目指す人々が、その途上で大学に行きつき、暖と一時の休みを求め、学内に流れこんできたのだとわかった。その中には、修学旅行生の姿も見られた。まだ「帰宅難民」という言葉が生まれる前のことである。学校は、大学の入学式や卒業式を行う記念館を開放することを決め、収蔵していた災害用の食料品を提供することになった。青山通りで出会った学生たちのことが気になり、学校に残ることを決め、その夜は学内を定期的に見回ることにした。

記念館に学生らしい姿が見当たらないので、職員に学生の居所を聴くと、外からの収容人数が増えつづけているため、学生は大学の礼拝堂に移したのだという。そちらに向かう。コンサートが開かれることもある礼拝堂は煌々と明かりが燈っていた。礼拝堂に足を踏み入れると、正面に掲げられた十字架が淡い光にぼうと浮かび上がっている。驚いたのは、無数の銀色の包みが、ところ狭しと堂の床を埋めていたことである。よくよく見れば、それは冷え込まないようにと渡された銀色の断熱防寒具を、学生たちが頭からすっぽり被って座りながら眠っていたのである。講義も終わったこの時期に、これほどの学生がまだ学校にいたのかと妙に感心するとともに、奇妙な感覚に襲われた。不謹慎ではあるが、銀色の卵—それはどこかSF映画に出てくるエイリアンの卵、あるいは冬眠しながら目的地を目指す宇宙船の乗組員を連想させた。その姿をしばらく見つめ、そっと研究室に引き上げる。気持ちはずでに、ここに居ない学生たちの安否に移っていたが、メタリックに輝く無数の銀の卵のイメージは、今も忘れることが出来ずに残っている。

震災をその空間的周囲で経験したことはそこまでであった。しかし震災の時間は終わっていなかった。福島第一原発の事故である。所属する学部の学生や受験合格者の安否確認に追われていたところに、電子メールが飛び込んできた。この時、学部のまとまった学生がフランスに文化研修に行っており、もうすぐ帰国の予定であった。それを引率していた同僚の教員からのメールであった。フランスでは、東日本は放射能によって全滅的な被害にあっているともっばらであるというのがその趣旨であった。震災後、あらゆる手づるを使って状況把握に努め、毎日得られた情報を、メールを通じて学部の教員に配信していたから、それを同僚が知らないわけではない。しかし相手は目に見えない放射能である。現地では、日本の学生とわかると、フランスにとどまることを親切に勧め、自宅を提供してもよいという声がかかっているという。学生の中に動揺が広がり、保護者からもフランスに残るか、関西の空港で降ろしてほしいとの連絡が入って困り切っているようであった。文面からは同僚自身の心の揺れが伝わっていた。チェルノブイリの原発事故を経験したヨーロッパは、原子力発電所の事故にことのほか敏感であることを改めて知らされた。一応テレビで報道を追っていたが、外部から見れば自分が事態の渦中に巻き込まれているかもしれないことに、この時初めて気づかされた。とにかく東京は平穏である旨を伝えたが、同僚が学生たちを納得させる材料はなかった。年齢を考え、放射能を少量浴びても仕方ないとは思っていたが、若い世代にとって汚染と被曝は切実な問題である

う。しばらく考え、思いいたったのは米軍の動きを何とか探ってみようということだった。

今から考えると大変恐縮なことだったが、アメリカは日本政府より事態を把握しているかもしれないと思いついた。おそらく放射能汚染の危険が見込まれる地域に、米軍や軍属、政府関係者は残さないであろう。スリーマイルの事故を経験し、イラク戦争で兵士の放射線被曝を経験したアメリカが、同盟国のためとはいえ、他国において平時に、駐留米軍にそのようなリスクを負わせるようには思われなかった。(この予測は申し訳ないことに外れた)。在日アメリカ市民に対しても、何らかメッセージがあるに違いない。そこで、ネットを通じ米軍関係についての情報をできるだけ掻き集め、地図と引き比べた。その結果、東京を中心に一応問題がなさそうな範囲に成田が入っているようだ と確信し、その旨を同僚にメールで伝えた。これで、学生たちの不安は収まった。日本の政府の公式の発表より米軍の動向のほうが説得力を持ったということに、いささかひりひりする想いを残しながら、学生たちが成田に到着するのを確認し、この件を終えることになった。

この頃、毎日夜遅くまで大学に残っていた。夜の渋谷は暗く、人通りも少なくなっていた。フランスの件で気づいたが、若者の姿がとても減っていた。もしかしたら、この程度の人間の数が、本来人間が自然に生きていく密度なのかもしれないなどと余計なことも考えたが、やはり若者のいない渋谷は寂しかった。しばらくそのような状態がつづき、それにも慣れ始めた頃、ある夜信じられない光景に出くわすことになった。渋谷を発車し、電車が原宿のホームに入って停まる。車窓から全く灯りの見えない暗い竹下通りに目を向けた。道路が動いている。よくよく見ると、それは人の群れであった。店が一つも開いていない暗闇の中に、大勢の(たぶん)若者がただただ蠢^{うごめ}いていたのである。夢を見ているような気がした。その姿と心に受けた印象を表現する術は今も持ち得ていない。呆然としている間に、列車は静かにホームを離れ、私の視界から人々の姿は消えていった。あれは夢だったのだろうか。だとすれば、人間的意味の時空の崩れが「私」を占めていたのだ。今でもどこか信じられない光景である。そのころネット上では、さまざまな噂やとんでもない情報が飛び交っていた。学生の中には、それを確かめるためにメールしてくる者もいた。そうかと腑に落ちた気がした。竹下通りは現代の「村の鎮守」だったのだ。村はずれの鬱蒼^{うっそう}とした森、その中に暗く沈む社。災いが過ぎ去った後、若者たちは恐る恐るそこに戻ってきて、お互いの無事を確認する。そこに人がいるということに生きていることを味わう。どのように通信手段が発達したとしても、最後に行きつくのは、それが誰かということすらわからなくても、生身の人間同士の今ここでの触れ合いなのだろう。そのように結論づけた。

この経験から間もなく、渋谷に若者が帰ってきた。渋谷は何事もなかったかのように喧噪の街に戻り、再開発の波に文字通り埋もれていった。巨大なビルが立ちはだかり、これまで見上げられた空はすっかり小さくなってしまった。スクランブルの周囲のビルの壁面にはスクリーンが埋め込まれ、眩い光の粒を行きかう人々に投げかけている。竹下通りの入り口にも同様なものが据えられ、通りは夜も煌々と照らし出されているが、深夜そこに行く人影はほとんど見当たらない。「祭り」は終わった。しかし、大震災の傷跡は依然として開いたままである。フクシマは何時終わるとも知れず、依然として人間を寄せつけない。100年に一度、1000年に一度と、責任ある立場の人から聞かされた。なるほどそれは気の遠くなるような時間である。しかしフクシマの過ごすであろうこれからの時間はそれよりも遠いかもしれない。人は1000年の想像力を持ちえないのであろうか。亡くなった宮大工の西岡常一は、かつて「自然の試験を通らないと、本当にできたと言えないのだから、安心はできない」と述べていた。この世の中には、1000年の先を見つめながら仕事をしている人々が現にいる。建築学者が西岡のインタビューを収録し

保存したDVDは、今でも研究室の本棚に置いてある。就活に悩んだ学生に観せるために。十字架の前に横たわっていた銀の卵たちと、真っ暗な竹下通りに集まった人々の群れ、そしてDVD動画の中で破顔一笑している西岡常一の人懐こそうな顔、それが私の3・11の記憶となった。

これまで長々と21世紀(まだたった18年なのだが)に起きた事どもを、経験に引き付けて綴ってきた。別に自分の儉しい体験を伝えたかったわけではない。環境と身体をめぐる人間的時間は、常に流れている。端的に変化している。多くの偶然的な事象が起きたとしても、そのほとんどはわれわれの意識に上ることもなく、身体刺激が神経パターンに記憶されるにすぎず、その意味を問うことはできない。認知的無意識である。しかし、ある時、ある特別な未知の「出来事」が起きると、人間は脳中枢を含めた全神経系を総動員し、そのことを知覚し、それと同じ刺激の記憶パターンを見つけ出そうとする。リベット実験によって明らかになったように、われわれの神経は受けた感覚を受動的かつ自動的に総合するよう反応するが、意識は遅れてそのことをあたかも能動的であるかのように追認している⁽³⁾。どうやら自己意識は最後に現れるらしい。「自由意志」はないかもしれないというこの実験結果は、アウグスティヌス以来信仰の前提として「自由意志」が必ず要請されるキリスト教および「理性的人間」、「自由な責任ある人格」を前提に置いた近代ヨーロッパ、要するに全西欧文明の根底に触れるスキャンダルであった⁽⁴⁾。われわれの意識とは、「出来事」に事後意味を与え整序するための「物語」であり、それこそが「人間的時間」の本質なのかもしれない。「神なき時代」に唯一残された確かそうなもの、「目的合理性」で武装された科学実験によってそれが示されたのであるから、これはかなり深刻な事態であった。

しかしそのことは同時に、同じ「出来事」に対して、同じ身体性を持った異なる人々がそれぞれの異なるイメージ記憶を持ち、そしてそれを自らのものと追認しつつ、「意味」を紡ぐことの可能性を保証するものだという点において、スピノザの意味での「コナトゥス」、あるいはライプニッツの意味での「モノド」(両者は相違するが)と呼ぶことができるのではないだろうか。それが相互に呼びあい、受けとめあうことが、(厳密な言い方ではないが)社会なのであろう。コミュニケーションには、そのようなイメージと記憶を伴う個体の時間性と他者の時間性とを結び、共同の「時間」と「意味」を形成する役割がある。「出来事」はその時、あるいはその再帰的な過程として、われわれの共通体験の中に定置され、未来を向く。そこにリアリティやアクチュアリティを与えているものは、個体の、そして他者の身体に埋め込まれた無数のイメージ記憶、体験記憶であるということになるのではないか。「過去」はメッセージ情報を越えるあらゆる外情報を含め、「今」に埋め込まれることで、「未来」を形づくっていく。

特権的な「出来事」とは、ある特異な瞬間が、未知との遭遇が、それぞれの身体性を通じ、多様な輪郭に隈取られた共同の体験として、人々の共同の記憶として認知され、そのことが「未来」を決定していくという、そのような意味において「特異的」なのである。試みたかったのは、そのような「出来事」につき、身体的感覚イメージや体験記憶を手離すことなくレポートするということであった。そこには、当事者固有のいささかの時空間意識の混濁が見られる。

3 ベンジャミン・リベット『マインドタイム 脳と意識の時間』(下條信輔訳、岩波書店、2005年)。またリベット実験について、晩期フッサールの理論展開を踏まえ、現象学の側から対質をおこなったものとして山口一郎『感覚の記憶 発生的神経現象学研究の試み』(知泉書館、2011年)を参照されたい。

4 キリスト教信仰における「個」と「自由」概念の生成については、クリストファー・スティッド『古代キリスト教と哲学』(関川泰寛・田中従子訳、教文館、2015年)、坂口ふみ『〈個〉の誕生キリスト教教理をつくった人びと』(岩波書店、1996年)を参照。

したがって「陶醉」ないし「無感動」という兆候が現れている。それこそが「出来事」が特異的であることの「兆候」なのである⁽⁵⁾。われわれは自らの「経験」を、他者を通してしか社会的「リアル」とすることができない。そこには何時もメディア的経験が寄り添っている。そのどこに「リアル」が立ち現れるのか。複数の次元を並行させ、視点の転換、時間の混淆によって個と社会とのそれぞれの「時間」の交差として取り出し、「出来事」がどのようにメディアを通じて個の「身体」とどき、判断され、常に遅れてやって来た「私」がどのような知とコミュニケーションを通じて、その都度「われわれ」であり得たかを探ってみたかったのである。歴史はそこにこそ現れるのだから。

しかしこの試みにも決定的欠陥がある。生きられ、果たされたものはよい。だが「出来事」の中で毀損されてしまったもの、死者の記憶や声は、どのように未来の歴史に参入できるのだろうか。この難問は、今は残しておこう。

② 「未来」はどのように引き寄せられるのか

21世紀の世界と日本が、政治においても、経済においても、そして社会においても不確実な時代に入ったことは否定できそうにない。ハムレットの言うように、「時間の関節が外れてしまった」ようだ。しかし普通の人には、自分はそれを正すために生まれてきたなどとはとても言えそうにない。「長期的には我々は皆死んでいる」と見得を切れるのはケインズほどの天才だけであろう。さりとて、一応大人であれば、事態を漫然と眺め、脳裏をよぎる次世代の若者たちにすべてを委ねるだけというわけにもいかない。そこで頼る術は確かな数値だろうというのが大方の考え方になった。本来の「理性」は、両大戦によってすでに相当毀損してしまっている。依然として信頼を失っていないのは、「目的合理性」にもとづく「人工言語」以外ないというのが、ポストモダンに浮かれた後の20世紀末の知的状況だったのではないであろうか。未来が見えないとなれば、無時間的に永遠に成立する「均衡」世界をアルゴリズムで解き明かしたところで、政策失敗の「犯人探し」以外の何が見込めるのであろうか。世界経済を牛耳ってきた主流派の新古典派経済学は、グローバル金融危機で^{ひっそく}逼塞してしまっただけに代り、これまで異端とされてきた制度派経済学や行動経済学が脚光を浴びるようになってきているが、政策を提言するだけのパラダイムを確立するまでにはいたっていないように思われる。まだ「共通言語」にはなっていないのである。政治にいたっては、「アフター・トゥールース」「オルターナティブ・ファクト」の世界にはまり込んでしまっている。こちらは「犯人造り」だ。相手を言葉でやり込め（本当は訴訟の場ではない以上そんなことはあり得ないのだが）、黙らせればそれでよい。テーマはポジション取りとステータスだけという言説がメディアに溢れ、耳がふさがれてしまう。フクシマ以降は工学系の未来学も怪しい。

残されているのは、デジタル革命によっていちじるしく「進歩」してきた情報科学と生命科学、その台座となるのは19世紀の自然科学で20世紀を無傷で生き延びた熱力学と進化論であった。歴史の意味が曖昧になるということは、「われわれ」の時間の「関節」が外れることに等しい。それではいっそ人間的「意味」をごっそり除いてしまっても成立する科学があればよい。これにより浮上してきたのが、ベイジアンの主観的確率理論である。事前の主観的なデータ分布を仮定し、その後は事後的なデータの分布パターン変化を検証し繰り返していくことで精度

5 「出来事」に際しての「兆候」については、拙稿「いま『戦争』を語ること」（松尾精文他編著『戦争記憶の継承 語りなおす現場から』社会評論社、2011年）を参照されたい。

を高めていく。そのための膨大な作業は、飛躍的にその機能を高めつつあるコンピュータが担ってくれる。「必然性」は死んだが、神の言葉は「蓋然性」の名前で語りかけて来る。デイヴィッド・ヒュームはそれを信念と呼んだのだが。そこにICT革命による脳神経科学の発展が結びつき、機械学習からディープ・ラーニングへの進化を通じて、行き詰っていた人工頭脳=AIのブレーク・スルーが訪れた⁽⁶⁾。その時から、IT革命、インターネット革命を通じて大量に積み上げられ、クラウドコンピューティングやユビキタスコンピューティングで増殖しつづける、サイバー空間上のフェイクも含むジャンク情報が、一気にビッグ・データと呼ばれる大いなる資産に変化した。因果関係を考えず、相関関係が確かめられれば、そこに未来のパターンを確率的に推計でき、オンタイムで限りなく知識パターンと事象の変化パターンが再帰的に共進化しつづけるであろう。もうすぐAIの時代がやってくるというのは錯誤も甚だしい。すでに特化型AIは、我々の生活の隅々にまで入り込んでおり、われわれの外部記憶となっている。システムに組み込まれたAIは不可視となり、絶えずバージョンアップを（勝手に）繰り返しながら、データを探り、パターンを取り出し、われわれの得る情報とその組織化、記憶を支えている。われわれはそれをコンビニエントなツールと思い込んでいるのであるが、リベット実験について述べたように、意識は常に現実に遅れてやってくるということを思い出そう。意識は操作主体であるとは限らない。バーチャル・リアリティ=VRの進化もいちじるしいが、これは拡張現実=ARの一部と考えてよさそうである。世間的にAIでイメージされているのは厳密には汎用AI(AGI) のことであるが、フレーム問題一つを考えてもそれはまだ入り口にたどり着いたにすぎない。そもそも人間の脳や遺伝子ですら、その機能そのものについては未だ多くのことを解き明かせていないのである。まして自己意識を持つ「強いAI」にいたっては、依然として人の心と同じに「ハード・プロブレム」であり続けている。

ところで、テクノロジー変化に早期に気づいたのは、複雑系経済学者のブライアン・アーサーであった。彼は、テクノロジーを①人間の目的を達成する手段、②実践方法とコンポーネントの組み立て、③文化に役立てることができる装置と工学の集合体であると定義づけている⁽⁷⁾。テクノロジーは階層構造をなしており、コンポーネントの一部の変化は、常に階層の上位と下位の変更を要請するので完成はなく、モジュール間相互の技術的な適応の必要から、部分的変化が構造全体に及び、進化していく。その動因は機会のニッチだとされる⁽⁸⁾。アーサーがこのような考えを持つにいたったきっかけは、20世紀後半に次第に明らかになった経済における「収穫逡増」の研究であったという。彼がそこで考え込んだのは、「収穫逡増」の効く経済で、二つの製品が現れた場合、そのどちらが勝者として市場を支配するのかということであった。解は複数あり得る。彼の採用したアプローチは、ランダムな事象が固有のポジティブ・フィードバックにより拡大され、時がたつうちに結果を確率的に選択すると考えることであった⁽⁹⁾。数理化が進んだ進化論のアプローチが持ち込まれていることは見やすい。進化生物学者のリチャード・ドーキンスのように、「文化遺伝子=ミーム」などという概念を理論的に無理に要請するよりは、はるかに洗練されている⁽¹⁰⁾。しかしここからアーサーは、驚くべき結論を引き出すことになる。テクノロジーこそが主体であり、経済や歴史、文化はその表現に過ぎない

6 脳科学とAIの進化についての総括的議論としては、アンディ・クラーク『現れる存在 脳と身体と世界の再統合』（池上高志・森本元太郎監訳、NTT出版、2012年）がある。

7 ブライアン・アーサー『テクノロジーとイノベーション 進化／生成の理論』（有賀裕二監修・日暮雅通訳、みすず書房、2011年）、p 40-41。

8 同上、p 221。

9 同上、p 6。

というのである。ここまで来ると、待てよと立ち止まらざるを得ない。アーサーの議論は「収穫逡増」の経済が前提されている。しかし人間の社会は「収穫逡増」の効かないさまざまなドメインで形成されている。なぜ彼はその一部を取り出し、すべてのドメインをその表現に過ぎないと言えるのであろうか。そこにはいささか「物神崇拜」の匂いがしないでもない⁽¹¹⁾。「収穫逡増」の効くのは、産業に知識が組み込まれた場合であることに注意を喚起し、アーサーの議論の問題点については、もう少し後で立ち返ろう。

アーサーの議論は、シュンペーターのイノベーション論のミッシングリンクを突くことによって広い影響を持つことになった。その中には、『テクニウム』のケビン・ケリーや、『第四の革命』のルチアーノ・フロリディなどがある⁽¹²⁾。ケリーの「テクニウム」や、フロリディの「インフォスフィア」といった概念は、アーサーの影響とともに生物学者のヤーコブ・フォン・ユクスキュルの「環世界」を意識してのものであろう。ユクスキュルとダーウィンの進化論はいささか相性が悪いので、より込み入った議論が必要となるが、ここではそれは問わない。ルイス・ボルクの「ネオテニー：幼形成熟」仮説、アドルフ・ポルトマンの「生理的早産」説を待つまでもなく、人間が刺激—反応系の本能によって規定されることが出来ず、外部に道具や言語を携えることによって、第二の自然＝人工環境を創りだすことで生き延びたであろうことは、繰り返し見届けることのできる発生論的「事実」である。テクノロジー環境をわれわれ自身と截然と分ける足場が保証されているわけではない。しかし、アーサーの議論が過去の歴史「事実」から引き出されている現在であるのに対し、進化人類学や考古学、古生物学まで動員し、時間軸を大幅に長尺にとり、直接「未来」に延長線を引くというのが、彼らの議論の進め方の特徴であることも知っておく必要がある。不確実な「未来」に確実なものがある。その事例として挙げられるのは、何時も「ムーアの法則」である。

ここまで来ると、レイ・カーツワイルの名前が浮かばないはずはない。あの「技術的特異点＝シンギュラリティ」の提唱者である。彼の議論の根幹は、「収穫逡増」を「収穫加速の法則」に読み替えたことにある⁽¹³⁾。変化の先は見通せなくても、加速度は今この時点で計測可能だというのが議論の胆になる。量ではなく「度」が問題なのだ。当然それは「延長」ではない。「ムーアの法則」自体は、経験則に過ぎない。このためカーツワイルは、指数関数的成長という概念を打ち出す。なるほど「ムーアの法則」は指数関数的である。今後の産業がIT、コンピュータと関わりなく発展することはおよそ想像できないから、そこに一定のリアリティがあること

10 文化の側から進化論を読み直したものとしては、ヴィンフリート・メニングハウス『美の約束』（伊藤秀一訳、現代思潮新社、2013年）が、進化論から文化にアプローチしたものとしては、アレックス・メスーディ『文化進化論 ダーウィン進化論は文化を説明できるか』（野中香方子訳、NTT出版、2016年）がある。ミーム論については、ロバート・アンジェ編『ダーウィン文化論 科学としてのミーム』（佐倉統・巖谷薫・鈴木崇史・坪井りん訳、産業図書、2004年）が、各分野からの網羅的アプローチをしている。

11 物神崇拜は、もともと宗教人類学の概念であったが、カール・マルクスの『資本論』において商品および貨幣の導出で使用されたことにより、社会科学一般の概念に拡張され、フロイトによって精神分析の中にも持ちこまれた。マルクスにあつては、冒頭商品において表象—実体シェーマで描かれていたが、日本では宇野弘藏により形態論的整理がなされ、廣松渉によって物象化論に総括されていった。また最近では、ブリュノ・ラトゥールによって、「物神と事実」の二項対立それ自体を批判する議論も現れてきている。問題含みの概念ではあるが、この概念は「仮想通貨」を考える上で有益でもある。大黒弘慈『マルクスと贋金づくりたち』（岩波書店、2016年）、ブリュノ・ラトゥール『近代の〈物神事実〉崇拜について—ならびに「聖像衝突」』（荒金直人訳、以文社、2017年）。

12 ケヴィン・ケリー『テクニウム テクノロジーはどこへ向かうのか？』（服部桂訳、みすず書房、2014年）、ルチアーノ・フロリディ『第四の革命 情報圏が現実をつくりかえる』（春木良且・犬東敦史監訳、新曜社、2017年）。

13 レイ・カーツワイル『ポスト・ヒューマン誕生 コンピュータが人間の知性を超えるとき』（井上健監訳、NHK出版、2007年）、p 55。

は認められる。現在の脳科学、情報科学はコンピュータの容量、計算能力の向上に多くを依存している。情報通信技術の変化の瞬間速度が速まっているということに気づいたことは、カーツワイルのセンスであろう。

しかし彼が技を利かせているのは、そこではない。人間が指数関数的成長に想像力が及ばないことを予じめ指摘するところである。先にこのようにフレームをかけられ断定されると人は思考を拘束され、抜け出せなくなる。だが、とカーツワイルはつづける。「ムーアの法則」は厳然として貫かれ、データによって根拠づけられているのではないか。このままでいけば、遠くならず、そう2045年にはAIが人間の能力を凌駕する「特異点」が来る。これが確約された「未来」なのだ。ここに彼の修辭的な捻りがある。27年後であれば、まだ現存のほとんどの世代が生きているはずだ。100年、1000年の指数関数的想像力は持てなくても、自分の人生の将来くらいは一応想像できる。このずれが「技」たるゆえんである。ここに行動経済学者ジョージ・エインズリーが想定する人間の「時間」に対する「双曲割引」説を重ねてみよう。エインズリーによれば、人間は愚かにして先の未来よりは近未来に得られるものにより高い割引価値を置く「非合理」な厄介者だという。(確かにそれも当たっていないわけではない)⁽¹⁴⁾。これを信じるならば、1000年の未来に想像は及ばないものの、「将来設計」ぎりぎりの27年後にそういう「特異点」が来るという予想に賭けてみたくなる誘惑が生まれまいだろうか。ここでは不確実性はリスクに置き換えられている。「正則」が何かは問われていないのだが、われわれには「人的資本」に投資する「自由」だけは残されるというわけだ。

ところで実は、この修辭は使徒パウロのものなのだ。パウロは約束された「来るべき時」が迫っていると認識していた。差し迫るその「時」、「特異点」に向けて心と体を「魂」において過酷に緊張させ、信徒たちに「言葉」を投げかけていた。だからパウロの場合、その「時」は不可避にやってきて、「今」に宿るものだと真面目に考えられていたのである⁽¹⁵⁾。ところが「その時」はなかなか訪れない。そのうちにローマ帝国がペテロの教会、パウロの信徒を公認してしまう。中世スコラ哲学の延々たる議論の根底には、何時もその問題が控えている⁽¹⁶⁾。近代のヨーロッパの思想家も常にパウロの「言葉」に惹きつけられ、それをめぐった。カール・マルクスは言うまでもない。フリードリッヒ・ニーチェが最大のライバルとしたのは、パウロであった。両大戦間期の危機の時代、ナチス法学者のカール・シュミットとユダヤ人思想家・文化研究者のヴァルター・ベンヤミンが奇妙にも触れあい、交差してしまったのも、共通するパウロの「言葉」があったからである。

かくしてパウロの「時の言葉」をなぞることにより、カーツワイルは現代の「預言者」となった。(使徒ではないけれど)。だから、彼がテクノロジーの先に「不死」を語るのには何の不思議もない。科学的批判はここでは無意味なのだ。すでに神が資本主義経由でテクノロジーに読み換えられているのだから。ブライアン・アーサーが経済はテクノロジーの「表現」に過ぎな

-
- 14 詳しくは、ジョージ・エインズリー『誘惑される意志 人はなぜ自滅的行動をするのか』(山形浩生訳、NTT出版、2006年)を参照。
 - 15 この込み入ったパウロの「時間」、パウロの「言語」については、ジョルジョ・アガンベン『残りの時—パウロ講義』(上村忠男訳、岩波書店、2005年)が詳細な分析を行っている。またパウロの「時」を、イエスの「時」と比較検討した優れた研究としては大貫隆『イエスの時』(岩波書店、2006年)がある。
 - 16 キリスト教中世における「時間」と「論理」と「言葉」をめぐり、近代的制度への影響を探った一連の研究として、瀬戸一夫『時間の政治史 グレゴリウス改革の神学・政治論争』(岩波書店、2001年)、同『時間の民族史 教会改革とノルマン征服の神学』(勁草書房、2003年)、同『神学と科学 アンセルムスの時間論』(勁草書房、2006年)、同『時間の思想史 アンセルムスの神学と政治』(勁草書房、2008年)がある。

いと言いつつを思い起そう。そしておそらく、ノーバート・ウィーナーが、新しい「サイバネティクス=人間機械論」を提唱する中で、皮肉にも機械の中に「神」をプログラミングしてしまったのである。しかしそうであるならば、「強いAI」は「キリスト」なのであろうか、それとも救済の前に現れると「黙示録」で語られる「アンチ・キリスト」なのであろうか。さらにはパウロにあっては、その「時」にもっとも重要なのは「愛」であるとされていたが、それは何よりもまず「神の愛」^{アガペー}であった。それでは「強いAI」は人を愛するであろうか。AIに熱狂しながら、それを日本のオタクとアニメ監督以外誰も問わないのが不思議である。そして最後の審判の時に選別されるのは誰か。エリック・ブリニョルフソンとアンドリュー・マカフィーは、その著『機械との競争』で、それに答えを出そうとしている。「最もスキルの高い労働者が高い報酬を得る一方で、意外なことに、最もスキルの低い労働者は、中間的なスキルの労働者ほど需要減に悩まされていない。この動向には、労働需要の二極化現象が反映されている」⁽¹⁷⁾。「両極分解」という古い神話が蘇ってくる。

ここでは「愛」は「人的資本」への投資、「スキル」に置き換えられているのである。機械に愛されるはずの「僕」。このようにして「物神崇拜」が回帰してくる。日本の歴史には、「占う」ものはいるが「預言者」は現れない。もともとメデイウム（メディアの単数形）は、マスコミとともに霊媒を意味したのだが、「預言者」となると舞台装置の次元がまるで違ってしまふ。だから西欧文明の根底を流れるこのモチーフがなかなか感じ取れない。こういった知的伝統を一応頭に入れておかないと、「未来学」をミスリードしてしまう危険がある。

欧米では—こういう言い方は好きではないが—修辞学や言語分析の延々とした伝統があり、研究者が常にこういうことを意識し、言説をチェックしてきた。「伝説の預言者たちは、出来事に対して影響力を持つことはなかったが、過去あるいは将来の不幸を、驚異や、秘密を開陳することで昇華させたのだ。背景となる世界や長期的な時間性の消失が、想像力の低下と相まって（見えすぎること透視能力は損なわれるものだ）、今日の預言者もどきたちに悲喜劇的な装いを与えている。かれらは、せっかちで、メディア装置に囲まれすぎており、共鳴装置であるみずからの環境の歴史と地理について無知なため、カタストロフィーを解釈するどころかむしろ、それを引き起こしがちだと言えるだろう。打たれたことのないハードパンチャーは慎重さが足りないもので、地図も見ずに壁に激突したりする。かれらは、理解することの純粹な喜びや、臨床的な視線の中立とは無縁なのだ。これらの守護者たちが、西洋の十字軍—それぞれの人に聖戦があるものだ—を著しく活気づけている。そして、精神の戦争で、言葉は選択的に破壊を行う武器であり、戦争そのものにもまもなく影響することになる」とメディオロジストのレジス・ドブレは手厳しく述べる⁽¹⁸⁾。これは直接には「戦争」をめぐるものであるが、「技術開発」でもそのベースは同型である。パウロの「時制」が常に意識されることになる。

アメリカの科学哲学者ジャン＝ピエール・デュピュイの、違う角度からの技術の未来についてのとてつもなく冷静な言葉。「覚醒した破局論は一つの狡知である。それは暴力を一つの運命、つまり意図はないものの、私たちが殲滅することも可能であるような運命に変えることで、人類を自分たちに固有の暴力から分離しようとする。ここでの狡知とは、私たちがあたかもその犠牲者であるかのようにみなすことに尽きる。この二重の操作、この策略は、おそらく私たちの救いの条件であるだろう」⁽¹⁹⁾。デュピュイがこのように、込み入った論理を駆使するのは、

17 エリック・ブリニョルフソン、アンドリュー・マカフィー『機械との競争』（村井章子訳、日経BP社、2013年）、p 99。

18 レジス・ドブレ『大惨事と終末論「危機の預言」を超えて』（西兼志訳、明石書店、2014年）、p 121。

アウシュヴィッツ、ヒロシマ・ナガサキ、9・11、そしてスマトラ沖の津波を念頭に置いているからである。20世紀、欧米が経験してきたのは「無邪気」であることの危険ということなのだ⁽²⁰⁾。「暴力」と「悪」への考察の果てに、デュピュイは「覚醒した破局論」というパウロの戦略の倒錯的使用に行きついた。(ということは、21世紀には覚醒していない破局論は始めからダメダメということだ)。「未来を作り上げるのは私たちだし、その方法もあらかじめ定まってなどいない。だが、私たちは、運命として刻印されてしまうようなものすら作り上げてしまう。私たちはいくつかのオプションから選択するのではない。私たちの運命を決めるのは私たち自身である。形而上学的芳香を失ってしまったこの表現は、再びその文字どおりの力をすべて回復しなければならない。未来は私たちの外部にある。それは、私たちを自分自身のさらに上へと押し上げ、人類の歴史全体を見渡せるような、おそらくは歴史に意味を付与できるような眺望を見出させてくれる梔子でもある。未来は私たちにとっての聖なるものだ。それは善でも悪でもありうるが、私たちはそれをあらかじめ予測できない」⁽²¹⁾。さてカーツワイルは、それらのどの「言葉」で語っているのであろうか、それが問題である。

3 地上に降り立つ天使あるいは郵便配達人

「ムーアの法則」の意味するところは、もはやはっきりしている。さまざまに取り出される指数関数的成長のケースをみれば、それが近代から始まっていることが見て取れる。資本主義の産業構造は、労働集約型産業—資本集約型産業—知識集約型産業と移行してきた。これが長期に見た指数関数的成長の内実である。人間には分業によるメリットがあり、資本は規模の経済が利き、知識は素材とは異なり累積的である。つまり「加速」する。「加速度」はその瞬間の不可視の強度を示すが、グラフそれ自体はあくまで二次元の仮想「視覚体験」(=VR)にすぎない。「ムーアの法則」はその第三フェーズにおけるもっとも典型的なパターンで描けたから、あたかもそれが未来を決定する、避けられざる「運命」の時間であるように感じさせ、人びとを考えることそのものから解放し、「来るべき未来」を受けいれやすくしたということなのである。

19 ジャン＝ピエール・デュピュイ『ツナミの小形而上学』(嶋崎正樹訳、岩波書店、2011年)、p 116。

20 近代啓蒙理性の限界については、批判理論のマックス・ホルクハイマーとテオドル・アドルノがついに指摘し、ハンナ・アーレントは「悪」の考察を推し進めることで、その「凡庸さ」を暴き出した。だが20世紀後半、ドイツの哲学者ペーター・スローターダイクが「啓蒙を懐疑するのも啓蒙」であるとし、シニシズムに溢れる21世紀の到来を予告、アメリカの進化心理学者のポール・ブルームは、共感(empathy)をすら否定した。共感とは同情(compassion)とは違い、認知的バイアスを持つがゆえに時に外部に対し排他的ですらあり得る。デュピュイはこのような捻じれきった知的状況を考えぬいたうえで語っている。それゆえ彼の言葉は、異常なほど冷徹だ。彼の個人への処方箋は、生死を分かち「出来事」の前でも観想する刹那を持つこと、それを自意識にまでとどかせること、そして全人類への処方箋は、「奇跡」が起きること、しかし我々がその「奇跡を期待しないという条件」付きで、としている。それはスローターダイクの言うシニシズムと紙一重である。(同上、p 125)なお、ブルームはその「共感」批判を通じて、「理性」の再評価を目指しているが、その足がかりとして、アダム・スミスの『道徳感情論』の「自制」(self-command)に注目し、デュピュイもまた、アダム・スミスの「共感」(sympathy)を「私益」(self-interest)や自己愛(self-love)との関係で再検討している。甦えるもう一人のアダム・スミスというわけだ。このように21世紀西欧近代がデッド・ロックに入ったことは明らかなのだが、しかしそれにアジアを対置してことが済む(=近代の超克)かの図式が無効であることは、過去の日本の経験で証明済みである。21世紀に入ってから日本のマスメディアやインターネット上の「言説空間」を重ねて見れば、今や同じ「兆候」が日本にも溢れかえっていることは、誰の目にも明らかであろう。ポール・ブルーム『反共感論 社会はいかに判断を誤るか』(高橋洋訳、白揚社、2018年)、ジャン＝ピエール・デュピュイ『犠牲と羨望 自由主義社会における正義の問題』(米山親能、泉谷安規訳、法政大学出版局、2003年)

21 デュピュイ(2011年)、p 124。

本当に考えるべきことは、この「加速」の動因と、その与える社会への効果である。動因については、とりあえず「利潤動機」と「競争環境」としておこう。しかしその効果となると、はるかに難しい。文化人類学的には、文化伝達は①親子の縦系列、②親以外の異世代との斜行系列、③同年齢集団の横系列によって構成されるとされる。①が直接的な文化継承の「個性」を担うとすれば、②からは一定の権威を伴った「一般性」が付与され、③によって状況依存的「知識改訂」がおこなわれる。世代交代は、これらが相まって、継承変化する「コミュニケーション体」であると考えることが出来よう。現代であれば、①は家庭、②は学校、③は交友関係となろう。これらの関係、特に③は直接的関係だけでなく、メディアを通じた「拡張現実」によって媒介されている。したがって情報メディアが広がりを持てば、③の肥大化は免れない。社会変化が「加速」すれば、状況依存型知識改訂が何よりも求められるようになり、②の「一般性」は「状況依存スキル」(コミュ力!)への変更を求められ、そして①は限りなく今この時の「情動」の場を浮遊していかざるを得なくなる。特化型AIは、その整理のためのツールとなるが、そこではエコー・チェンバー効果が働き、開かれた情報空間は、あたかも開かれているかのように「自閉」し、社会的分断が限りなく進められる。変化のスピードが速いので、情報として伝達すべきコンテンツがほとんど蓄積されないため、フレーミングしやすい「生の情動」と空虚な「マニュアル」、ポジションどりに過ぎない「リツイート(=RT)」がこれに取って代わる。AIは、これをビッグ・データとしてプライスフリーで収穫し、「相関関係」を抜き出し、フィードバックさせることで、政治・経済・社会の変化をさらに増幅する。「なぜ」、「なんのため」という意味を問うことは、とうに捨て去られている。マクロとミクロがこのように調整されるようになると、「体験」を通じて構成される「私」は、サイバー空間とリアルな空間の辻褄(その区分け自体がさらなるプロブレマティックなのだが)を合わせるため、メディア・ポートフォリオを通じて、複数のアバターを持つことになる。アイデンティティやプライバシーの概念はおそろしく変容していく。これは未来のことではなく、すでにスマホの筐体の中で進んでいる「現在」なのだ。

こういうわけで、経済学者は「認知バイアス」を語るが、何が「バイアス」なのかが、もはやすっかりわからなくなっている。そこでわれわれとしても、「普遍学」であることを高らかに謳ったこの学の始まりの時点にまで戻ってみる必要がある。もともとアダム・スミスは経済科学を目指したわけではない。彼が目指したのは、自然神学の社会的領域の理解であった。神の摂理はいかにして社会に成立しているのか、悪名高きバーナード・マンデヴィルの「私悪すなわち公益」という論理に対抗し、自由な社会の論理をどのような論理立てで証明してみせるのか、それが『諸国民の富』の課題であった。彼は諸個人の私益追及を通じて「神の見えざる手」が社会を調整する姿を描いたが、それを支えていたのは『道徳感情論』で説かれた「共感(sympathy)」であった。「私益」追及は、「共感」に支えられて「公益」となる。それはあたかも、コインの裏表のようなものだ。(鑄貨は、その表に価格数値が刻印され、裏面にはそれを保証する権威が刻印されている)。フランシス・ハッチンソンの弟子であり、ヒュームの盟友であったアダム・スミスにとって、ヒュームとは違う道筋を辿ったこととなったとしても、やはり「情動」はその始めから、彼の「経済学」にとって欠くことのできない裏打ちだったのである。その後の経済学は、この裏面を忘却していった。しかし現実の経済は、けっして「情動」を失ったわけではない⁽²²⁾。社会を動かす力がなんであるのか、19世紀中期を生きたカール・マルクスは、それを「蓄積衝動」と「恐怖」に求めた。経済学者ではなかったが、19世紀末を生きたフリードリッヒ・ニーチェは、「力への意志」とルサンチマンの原泉である「嫉妬」に見出した。そして20世紀をデザインしたジョン・メイナード・ケインズは、「アニマル・スピリッ

ト」と「不安」を発見した。古典派についての開発経済学者アルバート・ハーシュマンの仕事を除き、彼らの理論としては、得てして前者だけが切り離されて取り出されるが、後者を含むことこそが、彼らの論理を強靱にし、時代の変化を越えて、繰り返し蘇らせてきたのではないだろうか⁽²³⁾。

「恐怖」、「嫉妬」、「不安」は、おそらく人間の本源的情動である。(ここにもう一人の20世紀の巨人、フロイトを置いてみる必要がある)。それは人類史の初期からわれわれをとらえ、出産を通じ、再生産されてきた。生命進化の時間に比べれば、人類の歴史は取るに足りない。人間は、本能が万全に機能しなかったがゆえに、自らの身体性の延長に第二の自然=人工環境を作り出し、それを作り変え、進化させていくことによって、あらゆる地球環境に適合してきた。これが現生人類のグレート・ジャーニーだったのである。われわれは今、その心の一部である「知性」をデジタル的に複製し、「人工知能」を創り上げつつあるが、それによって「心」のすべてが複製されるわけではない。データとなった「行動」の軌跡も、「心」そのものではない。だからこそ、AIはわれわれの琴線を揺るがす。忘れられ、放置されている「情動」が声を上げる。「恐怖」、「嫉妬」、「不安」がデジタル空間に充満することになる。「強いAI」を考えるとすることは、われわれの心を変えることではなく、これまで人類がそうしてきたように、われわれの「心」を再定義することなのだ⁽²⁴⁾。しかし、現状を見れば、「不安」が、われわれを駆り立て、確実な未来を得させようとし、情報デバイドによる格差を生みだし、「嫉妬」と「恐怖」が競争を激化させ、社会を加速し、そのことがさらなる「不安」を再生産している。ICTは、この表裏一体となった情動を、世界の中で同期化させつつある。失われようとしているのは「意味」、それが生成してくる経路依存的な「文脈」、すなわち「歴史」である。オンタイムでつながり続けることは、「永遠の現在」ではない。それは「無限に延期される未来」にすぎない。同様に、異時点間のデータを比較対照することは「歴史」ではない。それだけであるならば、それはむしろ「歴史」の忘却である。

ヴァルター・ベンヤミンは、彼の遺稿、いわゆる『歴史哲学テーゼ』の中で、「歴史の天使」について語っている。クレーの「新しい天使」という絵を見出した彼は言う。「歴史の天使はこうした姿をしているに違いない。歴史の天使は、顔を過去のほうへと向けている。わたしたちの眼には、出来事の連鎖と見えるところに、かれはただひとつの破局を見ている。たえまなく瓦礫のうえに瓦礫をつみかさねては、かれの足もとに放りだしている破局をだ。できることならかれはその場にとどまって、死者を目覚めさせ、打ち砕かれた破片を集めてもとどおりにしたいと思っている。だが、エデンの園から吹いている強風がかれの翼をからめとり、その勢いが激しいために翼を閉じることがもうできなくなっている。この強風はかれが背を向けている未来のほうへと、かれをとどめようもなく吹き飛ばしてゆく。そうしているうちにもかれの

-
- 22 情動についての先駆的研究としては、レク・セミョーノヴィッチ・ヴィゴツキー『情動の理論—心身をめぐるデカルト、スピノザとの対話』(神谷栄司他訳、三学出版、2006年)、ヴィクトーア・フォン・ヴァイツェカー『パトゾフィー』(木村敏訳、みすず書房、2010年)がある。脳科学からの、もはや古典と言ってよい成果としては、アントニオ・ダマシオ『デカルトの誤り 情動、理性、人間の脳』(田中三彦訳、筑摩書房、2010年)同『感じる脳 情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ』(田中三彦訳、ダイヤモンド社、2005年)がある。
- 23 アルバート・ハーシュマン『情念の政治経済学』(佐々木毅、旦祐介訳、法政大学出版局、1985年)。
- 24 ギリシャと西欧近代における「心」の定義の変容についての優れた考察としては、中畑正志『魂の変容 心的基礎概念の歴史的構成』(岩波書店、2011年)が、中世ヨーロッパによるギリシャの「心」の再定義については八木雄二『聖母の博士と神の秩序 ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスの世界』(春秋社、2015年)が大変整理されていて、有益である。われわれの「身体」はさして進化しているわけではない。われわれが第二の自然を創り出すことによって、「心」を再定義してきたという点で多様性の中の一一般性を担保してきた種であると言えるかもしれない。

目の前では、瓦礫の山が天にとどくほどに高くなってゆく／わたしたちが進歩と呼んでいるものは、まさにこの強風である」⁽²⁵⁾。マッシモ・カッチャーリは、マイモニデスに拠りつつ、この天使がユダヤ教のタルムード天使学に根ざすものであることを指摘している。ユダヤの天使たちは、神羅万象常なき力の一つ一つであり、したがってただ一度、たった一つの使命を待ち受け、生成に寄り添い、そして溶融していく。それは人間の一回性のはかなさに、みずからはかなさで寄り添うのである。カッチャーリは、天使は「通り過ぎることも伝達することも仲介することもない。彼自身が通路なのであり、瞬間のイコン」なのだという⁽²⁶⁾。そして新しい天使＝ベンヤミンの「歴史の天使」は、この天使たちの最後に現れる天使の姿であるとする。「なぜならこの天使だけが、そのさまざまな名のうちに過ぎ去る儂さ（我々の存在様態）を現実的に表現しているからである。…儂い一瞬の力の姿である天使は、瞬間をその個人的な一回性の中に置く力であり、瞬間を一連の継続から解放する。したがって新しい天使は彼の一瞬のいまの内におり、単に未経験な未完の天使なのではない。自らの空間にあって彼はおそらく本当にわれわれの「心の熱く儂い波」に浸されたのであり、二度とない現在をついに表現する」と述べている⁽²⁷⁾。

ところでキリスト教は、そうはいかなかった。すでに述べたように、パウロが差し迫っていると信じた「その時」は繰り延べられ、キリスト教はローマ帝国の中に受け入れられていく。さらにそのローマ帝国が崩壊し、ヨーロッパ中世が訪れる。それでもなお、創造主である「神の摂理」は貫徹されていなければならない。イスラム経由で再発見されたギリシャの哲学、特にアリストテレスがヨーロッパの知に衝撃を与える。その時現れた巨人が、天使を再発見する。トマス・アクィナスその人である。アクィナスの『世界統治論』で提示された「ガバナンス」という概念は、ヨーロッパの知的伝統を通じ、現代にまでとどいている。ローマ帝国が崩壊した後、ヨーロッパの普遍性を代表できる組織らしい組織は、パウロが組織したペテロの教会組織（特に修道院）だけであった。ヨーロッパの政治体は、それをなぞることになる。アクィナスが『世界統治論』で目指したのは、キリスト教の教義と11世紀に再発見されたアリストテレスの「知」を整合し論理立てすることであった。このため、彼は天使に神のための位階・代務・秩序を与えることになる。そしてこの天使の秩序は、世俗的権力の秩序に二重写しされる。（コピペされる）。これが、西欧世界が創造した「官僚制」の起源なのだ。トマスによって天使は、栄光の名のもとに神に奉仕する仲介者（メディア）となったのである⁽²⁸⁾。その後天使はどのようになっていくのか。宗教改革によって、キリスト教会は分裂した。世俗的権力である神聖ローマ帝国も安楽死し、絶対王権を経て、近代国民国家が誕生していく。聖俗分離により、国家の秩序は「目的合理性」（マックス・ヴェーバー）に使える近代的官僚制に継承される。官僚とは世俗化された「天使」の似姿だったのである。この時官僚にはもう一つの役割が与えられた。それは「使者」としての役割である⁽²⁹⁾。

このように考えてくると、『負債論 貨幣と暴力の5000年』で世界の耳目を集めたアメリカの文化人類学者デヴィッド・グレーバーの官僚制、特に郵便局についての仰天の指摘が正当なものであったことが受け入れ可能となる。グレーバーは、その著『官僚制のユートピア テク

25 ヴァルター・ベンヤミン『新訳・評注 歴史の概念について』（鹿島徹訳・評注、未来社、2015年）、p 54。

26 マッシモ・カッチャーリ『必要なる天使』（柱本元彦訳、人文書院、2002年）、p 48。

27 同上、同ページ。

28 ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光—オイコノミアと統治の神学的系譜学のために—』（高桑和巳訳、青土社、2010年）、p 284。また、中世哲学全体の中に「天使論」を位置づけた優れた日本の研究として、八木雄二『天使はなぜ墮落するのか—中世哲学の興亡』（春秋社、2009年）がある。

ノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』に、「脱魔術化の魔術化、あるいは郵便局の魅力」という一節を置いている。その中で、近代郵便システムが勃興する国民国家の象徴であったことをドイツの事例で示し、「ドイツにおいて国家は、なによりも郵便局によって形成されたとすらいうことができる」と断じる⁽³⁰⁾。グレーバーは、驚くべきことに、政治的立場を全く異にする者が、ドイツの郵便制度についてだけは、同じ結論を得ていると指摘する。彼が挙げるのは、マーク・トウェイン、そしてウラジミール・レーニン（彼はそれこそがソヴィエトのモデルであると理解した）。無政府主義者のピョートル・クロボトキンですら、万国郵便連合こそがアナキズムのモデルなのだと考えた。さらにアレクシス・ドゥ・トクビルが、アメリカの郵便制度と、検閲がなされていないことを絶賛したことを挙げ、「事実、十九世紀のほとんどを通して、南北アメリカ大陸の大多数の眼には、実質的に、郵便事業が唯一の連邦政府であった。一八三一年までには、それ以外のすべての政府機関をあわせたよりはるかに凌駕する数のスタッフを抱えており、実質的に軍隊よりも大きく、ほとんどの街の住人にとっては、郵便局員が、じぶんたちが顔をつきあわせる可能性のある唯一の連邦職員だった」とする。そして南北戦争後になると、より自由でより合理的なあたらしい社会の胎動を表す言葉は、「郵便局化 (postalization)」と呼ばれ、それが進められれば、民間企業 (private business) ですら効率化されると議論されていたとする⁽³¹⁾。そもそもアメリカでは、独立革命の最初を告げ、伝達したとヘンリー・ワーズワース・ロングフェローに謳われ神格化されたポール・リビアの「真夜中の騎行」が「愛国心」のシンボルとされている。彼は郵便配達人ではなく、独立派の伝令人の一人に過ぎなかったが、ロングフェローによって「革命の天使」となった。郵便制度、それはかつて多くの思想家にとってユートピア (=天国のアイコン) の現実的根拠だったのである。このような郵便局ないし郵便制度のイメージが総崩れとなったのは、1980年代であった。これはレーガン政権の下、政府予算の削減という意図の中で進められ、「going postal」とは、「キレる」ことを意味するようになったのだという。

その後、クリントン政権でアル・ゴア副大統領が進めた「情報スーパー・ハイウェイ構想」が火をつけ、インターネット革命が始まる。このコミュニケーション革命を担ったのが、西海岸に巣くうウルトラ・リバタリアンやサイバー・アナキストであったというのは、示唆的である。連邦政府・国防省は慌てて、それをコントロールしようとした。こうして西海岸と東海岸との相克が始まった。つまり時代を経て、テクノロジーは様々に変化したが、人間的時空間編成を組み替える情報通信こそが人々を「陶醉」させ、「熱狂」させる。拡張するものとコントロールするものがせめぎ合う。それは現代の「仮想通貨」とブロック・チェーンの関係にまでつづいている。グレーバーは、郵便制度の歴史について、とても面白いパターンを読み込んでいる。

29 天使問題をメディア全般に広げて展開した他の研究としては、ジュビレ・クレマー『メディア、使者、伝達作用—メディア性の「形而上学」の試み—』(宇和川雄他訳、晃洋書房、2014年)がある。そこでは「意思疎通の人格的原理」と「伝達の郵便的原理」を区別し、「郵便的原理」の復権が必要であると主張している(同上)、p 8。そして「意味論的視座においては、「隠れているもの」は感覚的なものの背後にある意味である。それに対してメディア論的な視座では、「隠れているもの」は意味の背後にある感覚的なものである」としている(同上)、p 22。本稿の冒頭の極私的ケース・スタディーにおいて、あえて人間の感覚イメージの実際の経験と、その歴史的な脈による意味化・文脈化にこだわったのは、伝達とメディアの問題を意味論的に、そして総合的に解き明かすためのレッスンだったということである。今問われているのは、IT革命ではなく、ICT革命であると考えからに他ならない。

30 デヴィッド・グレーバー『官僚制のユートピア テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズム』(酒井隆史訳、以文社、2017年)、p 220。

31 (同上)、p 225-226。なおグレーバーが当該箇所の典拠としたと思われるダニエル・ヘッドリク『情報時代の到来 「理性と革命の時代」における知識のテクノロジー』(塚原東吾・隠岐さや香訳、法政大学出版局、2011年)、p 207を併せ参照されたい。

それは①新しいコミュニケーション・テクノロジーが軍隊から発達してくる、②それは急速に発展し、日常生活を根本から変革する、③目も眩むばかりの効率を有すると評判になる、非市場原理で機能しているため、未来の経済システムの最初の胎動とラディカルが飛びつく、⑤にもかかわらず、それは直ちに政治による監視、広告と望まれないペーパーワークの果てしない新規格を拡散させる媒体と化す。(ハーマン・メルビルの『バードルビー』の代書人バードルビーの言葉が思い出される。「しないほうがいいのですが……」)。グレーバーが言いたいことは明らかである。郵便とインターネットは同じパターンを描いている。その理由は、明らかである。ネットワークは、われわれが創りだすとともに、われわれを準備もしている。その基盤となるわれわれの脳や身体は、おおよそ60万年前からほぼ進化していない。われわれは文化伝達され、拡張された「経験」によってパターン化された外部・内部記憶を通じ、テクノロジー変化を第二の自然に積み上げ、再帰的に制度化していくのである。神秘的なことはどこにもない。

そこで通信省が気になり始めた。郵政省は郵政三事業の現業および監督官庁であったから、戦後世代の身としては、それがすべてであるように思いがちである。しかしその前身である通信省は一むろん郵便業務を最大のものとしたことには変わりはないが一貯金、保険、電信電話、放送、電気、鉄道、陸運・海事等々多くの分野を管掌所管した。それを現代風に言えば、時代の要請により、モビリティ、コミュニケーション、メディア、エネルギーを所管し、また手放してきた官庁である。(戦後郵政省になっても、郵貯一財投を通してこれらのインフラストラクチャーと繋がりつづけてきたとも言える)。およそネットワークと関わる事業は、通信省が所管し、あるいは仲立ちしてきたのである。(挙げられた事業はすべてフローを持ち、それがチャンネルとノードで結ばれている)。いったいこの官庁は、なにものであろうか。それ自体がもう一つのハイパー・メディア、あるいはメタ・メディアだったのではないであろうか。そうであるとすれば、日本近代にとって、その意味はなんであったのか。しかし通信省の各事業を課題とする研究はあっても、そもそも「通信省とは何であったか」を主題とする研究はほとんどないのではないか。これは不思議なことである。ジュビレ・クレマーはこのことにもヒントを与えてくれている。「日常的な使用においてメディアは何かを現象させるが、メディアが示すものはメディア自身ではなくメッセージである。したがってメディア現象においては、感覚的に目に見える表層が意味となるが、目に見えないメディアがその深層をなしている」⁽³²⁾。そう、通信省の事業は目に見えるが、通信省の本質そのものは、深層に沈み込み、その意味を伝えない。ユダヤの新しい天使たちは言葉を発しない。生成変化に寄り添い消えて行く。別の言い方をすれば、眼鏡をかけて世界を見る時、われわれは眼鏡それ自体を視野に入れることはできないのである。

ベンヤミンは、ユダヤ人は未来を探ることを禁じられ、過去を回想することを教えられたと述べている。それにより、ユダヤ人は、古い師に予言を求める人びとがとりこになっている「未来の呪力」から解放されたと言っている。だからといって彼らの未来は無機質なものではなかった。未来のどの瞬間も、そこを通過してメシアがやってくるかもしれない「小さな門」だったからである。メシアを望むべくもない21世紀の日本人に許されるのは、「過去」を引き受けながら、「未来」を宿す「今の時」に創造の思いをはせることであろうか。「創造性」、それではそれは、どこに宿るのであろうか。これについても「終わり」のベンヤミンがそれを解くカギとなる。ベンヤミンの「歴史の天使」は、過去をかつと睨んでいる。過去は時系列としてではなく、廃墟として積みあがっている。(建物は竣工の時から廃墟化が始まっていることを思い起こそう)。

32 クレマー (2014年)、p 16。

すべての廃墟は、そこでお互いに「星座」のように現れる。(全く違う距離の星たちが、それぞれの時間を経て、今まさに同じ時に、「私の」頭上で輝いているように)。「歴史の天使」は、そのはかなさを知るがゆえに、過去を一つも取りこぼさない。なぜなら、完成し得なかった夢の残骸がすべてそこにあるのだから。廃墟、それは「可能性」の別の呼び名である。新しい天使が現れて、最後にそれを完成させる使命を果たすかを見とどける。それが「歴史の天使」の役割であるから、彼はその「場」を離れたくないのだ。

ナチスドイツ軍が迫ってくる中、ベンヤミンはパリの国立図書館、古文書館や資料館、博物館を離れがたかった。このことが、彼の亡命の機会を奪った。スペインに逃れる途上、ピレーネ山中でベンヤミンは自死を遂げている。彼が最後まで大事にしていた「黒い鞆」の行方はわからなくなったが、彼の膨大な研究資料は、パリであるジョルジュ・バタイユに委ねられ、大西洋を渡ってハンナ・アーレントのもとにとどけられた。それにより、現代のわれわれは、ベンヤミンの「声」を聴くことが出来る。そしてそこから、取り出されるインスピレーションは未だ汲みつくされていない。ベンヤミンの膨大な研究を預かり、秘密裏に保管し、アメリカへ仲介し、伝達したバタイユは、国立図書館の司書であった。ベンヤミンの遺稿は、こうして国立図書館の中でひっそりと眠りにつき、「復活」の「その時」のために、多くの伝達人の手によってわれわれにとどけられたのである。「歴史の天使」がどこに宿るかは、もはや明らかであろう。そして最初に残していた問い、死者の声はどのようにして聞き取られるのかも。

そこにこそ「未来」と「希望」がある。

(すぎうら せいし 青山学院大学 総合文化政策学部 教授)